

# 荒波乗り越え

# コバリキ (新潟市中央区)

■ 2 ■

# 石炭ストーブに活路

時代にともに  
 にいがた企業  
 ヒストリー  
 Niigata

建設業のコバリキ(新潟市中央区)の前身「小林力三商店」は、新潟と満州(現在の中国東北部)を結ぶ貨物船の代理店業で飛躍していく。襲名して創業者の父を継いだ2代目・小林力三氏の代には、満州国の建国で輸送量が増大していた。  
 1941年の日米開戦後、太平洋側の航路が封じられる

と、新潟港は日満貿易の生命線となる。戦争の混乱の中、大陸との輸送ルートが集中したことで商店も繁忙を極めていた。  
 長引く戦禍で食料に乏しかったため、満州からは大豆など食料が運び込まれ、新潟からは機械類や肥料などを送ったという。あふれる貨物をピストン輸送した。「終戦間際

## 敗戦で消滅 日満貿易転換



大連汽船の河北(かほく)丸。1934年ごろの就航時から大量の貨物を積んで日満航路を往復し、小林力三商店も一翼を担った

福祿の石炭ストーブ工場。まだ学生だった小林亨氏(後列左から3人目)が派遣された=1950年代、埼玉県川口市



燃料事業は大幅な縮小を迫られ、新社長の亨氏は難しいかじ取りを余儀なくされる。

45年、敗戦による満州国の消滅とともに日満ルートもその必要性を失い、商店と大陸との関係も途絶えた。商売はいや応なしに大転換を迫られる。  
 × 「大陸へ渡っていたころが、力三が最も輝いていた時ではないか。戦後は燃え尽きた気持ちもあつたはず」と、2代目力三氏の孫の  
 × 大シエアを誇った都内のメーカー「福祿」の代理店業務を担い、自社が扱う石炭とセツトにして学校などに販売。ス  
 × かつて国内で主流の暖房器具といえば石炭ストーブだった。力三氏は石炭の使い道としてストーブに着目。当時  
 × 日本は高度経済成長期を迎えていた。国は石油をエネルギー政策の中心に据え、62年に国内の石油供給は石炭を抜いた。戦後復興を遂げつつあ  
 × 小林力三商店には暗いムードが漂い始めていた。主要エネルギーの転換で社業が大きく揺れたこの時期、2代目力三氏の長男である小林亨氏(87)が入社する。65年には31歳の若さで社長に就くが、就任までのわずか4年のうちに石炭など燃料関係の売り上げが売上高全体に占める割合は半減していた。  
 × その後、自動車の普及や重化学工業の発展で国内の石油需要は大幅に拡大したが、小林力三商店は「残念ながらその波に乗ることはできなかった」と建氏はつぶやく。

には大豆の袋詰めも間に合わず裸で積んで来た」と、力三氏は新潟日報のインタビュアーに当時の切迫した状況を語っている。  
 米軍は日本の海上輸送の寸断を図り、太平洋側や瀬戸内海の港湾地帯に機雷を投下。間もなく新潟港を含む日本海側も標的となった。終戦時には多くの船が沈没し、残った機雷による被害は戦後も続いた。  
 × 山口県の炭鉱へ酒や土産を持って何度も通い詰めたという力三氏。徐々に関係を深める中で、石炭の調達が可能になる。戦後の復興期で石炭の需要は大きく、練炭の製造に加え、石炭の仕入れ販売に力を入れた。  
 × 山口県の炭鉱へ酒や土産を持って何度も通い詰めたという力三氏。徐々に関係を深める中で、石炭の調達が可能になる。戦後の復興期で石炭の需要は大きく、練炭の製造に加え、石炭の仕入れ販売に力を入れた。  
 × 山口県の炭鉱へ酒や土産を持って何度も通い詰めたという力三氏。徐々に関係を深める中で、石炭の調達が可能になる。戦後の復興期で石炭の需要は大きく、練炭の製造に加え、石炭の仕入れ販売に力を入れた。

現在のコバリキ社長、小林建氏(60)は述懐する。  
 × やがて商店の一時代を築いた船舶代理業に復調の兆しが見えてきた。  
 × 大連汽船は敗戦で事業停止になったが、一部残った船舶を使って47年、東邦海運(現NSユニテッド海運)が設立されていた。商店は事業の拡大を見据え、東邦海運の船舶代理を手掛けることを決める。その後、運送部門は別会社として独立。燃料類やセメントなどの建設資材の取引を強化し、商社としての事業に集中していった。